



## ここまでの全道中、人が自分の 子を抱くように、主が私を…

横田 早紀江



みなさん、こんにちは。この拉致問題の時の長さに驚いています。気持ちはいつも神様に祈って平安にさせていただいていますが、年齢とともに体力がなくなってきたことを最近しみじみ感じます。主人（滋さん）が入院していて私一人家にいるものですから、息子があれやこれや心配してくれています。

それでもいつも、こうして神様を信じて救っていただいたことに感謝しています。一つ一つの出来事が起きるたびに、大波に揺られるような思いですが、どんな大きなことも小さなことも、思い返すと、ほんとに神様はご自分の手のひらに私たちを置き、守ってくださっているということを感じます。そして、やがて天に迎えていただくことができるという大きな喜びが待っている。こんな幸せなことはないと思っています。

拉致問題は考えられないような経験で、初めは被害者が気の毒だ、かわいそうだといいところから始まったと思うんですが、ある人に、「これは原罪だよ」と言われてハッと思うところがありました。アダムとエバが犯した罪、その原罪がすべての人間の中に宿っていて、それがどこかで芽を出していく。今世界で起きていることもその一つで、どんなにりっぱな人物であっても、国のリーダーは自分の国を第一にしなければならぬ。そういう中で大切なことが退けられていくことを見ますし、人の罪というものはずいものだなと思います。それは普通に暮らしている状態では、理解しろと言われてもわからないことです。そんな中で私は、キリストのことばにしかすがれないのだと知りました。信仰深いヨブでさえ、苦悩の中で妻から、「こんなひどい目に会わせた神を呪って死になさい」とまで言われましたが、神を信じる信仰を貫いた。そのヨブの生きざまに初めて目を覚ましていただいたところから、私は救いに入れられました。

それから今日に至るまでの41年間、めぐみと別れたままの人生を歩んできました。めぐみと一緒に暮らしていたとき植えた小さな

植物が今ではベランダの天井に届くまで育ちました。それだけの年月が過ぎているのです。中1の時のめぐみの物が全部そのまま残してあって、「これはあの時あなたが置いていったものですよ」と言って、見せてあげたいと思いつながり祈っています。入院している主人の病室にめぐみの写真を飾ってあり、それを見せながら「もうすぐ帰ってくるかもしれないよ」と言うと、じっと見て、「うん、頑張る」と言おうとしているのが伝わってきます。マッサージで血流がよくなり元気になって、意識もはっきりしてきています。

聖書を読んでいたとき申命記1章31節が心に響いてきました。「この場所に来るまでの全道中、あなたの神、主が、人が自分の子を抱くようにあなたを抱いてくださった」。ほんとうに主が共にいてくださって、私はここまでこれたのだと実感しました。

先日、2回めの米朝会談の前に、家族会が安倍首相にお会いしました。何とか正恩氏にトランプ大統領から生の声で家族の思い、怒り、悲しみを伝えてほしいと、安倍首相にお話ししてきました。もうこの辺で、明るい兆しが見えてほしいと思っています。お祈りください。

(2019年2月19日の定例祈り会より)